

質疑応答書

科目名：フランスの図書館と読書文化

講師名：須永 和之

質問

フランスには旧植民地からの移民が数多く滞在しているようですが、彼ら彼女らに対し図書館は何らかの支援をされていらっしゃるかもしれません。お教えてください。「路上の図書館」がそれに当たりますでしょうか。

また、電子化への取り組みはいかがでしょうか。

回答

フランスの公立図書館は移民系の住民に特別な支援は行っていません。フランスは基本的に移民に対して同化政策を採っていて、フランスの文化・社会になじむように教育と施策を行っています。うがった見方をすれば、多文化サービスとして移民たちのオリジナルの文化を尊重することは一種の差別につながると思うフランス人もいます。移民系でもフランス社会で生活するためにフランス語を学び、自立した市民として互いを尊重しあうことが前提です。

「路上の図書館」は移民系の住民とその子供たちを特定の対象としていません。根っからのフランス人でも貧しい子供たちも対象としています。

英国ロンドン東部のタワーハムレッツ地区のアイデアストアでは、移民系の地域住民のオリジナルの文化を尊重して、ベンガル語の本をそろえています。

ちなみにパリのアラブ世界研究所の図書館では、アラビア語の資料が閲覧できます。アラブ系の市民が多く利用しています。

各地の図書館で電子書籍の貸出サービスを進めています。また、フランス国立図書館はガリカ Gallica で資料を電子化してインターネットで公開しています。

質疑応答書

科目名：フランスの図書館と読書文化

講師名：須永 和之

質問

須永先生に聞くことではないかもしれませんが、フランスの図書館の利用、貸出が有料であることに関して。日本の図書館も有料にできないのか、という命題に対して必ず出てくるのが図書館法 17 条に反するから、という回答ですが、必要ならば図書館法を改訂すればいい話だと思いますが、なぜ日本では図書館の有料化を真剣に考えようとしないのでしょうか。

回答

フランスに限らず、少なくともドイツ、オランダでは図書館の貸出サービスを年間登録料として有料化しています。日本は米国の公立図書館の「無料公開・公費支弁」の精神が息づいていて、梃子でも動かしようのない状況です。しかしながら、図書館の貸出サービスが民業である著作者・出版業・書店を圧迫しているとの指摘がある限り、無料公開の原則を見直すべきでしょう。もちろん、青少年、特別な支援を必要とする人々、高齢者、低所得者への貸出サービスは無料とすべきです。国全体で論議するには時間がかかりすぎるでしょう。地方自治の尊重が叫ばれている今日、各地の条例で対処すべき時が来ていると私は考えます。ちなみに、今回の研修の講師を務めた吉田右子先生の近著『オランダ公共図書館の挑戦：サービスを有料化するのはなぜか？』も参考にしてください。

質問番号：③

質疑応答書

科目名：フランスの図書館と読書文化

講師名：須永 和之

質問

講演の中の8「パリ図書館散歩」および、9「フランス各地の図書館」において、フランスのユニークな図書館をご紹介いただき、大変興味深かったところです。

その中で、理工学に特化した図書館があるとお話がありましたが、その図書館について、その名称や所在地、設置の経緯や目的など詳細にご教示いただきたい。(聞き違いであれば、回答は不要です)

回答

純粋な理工系ではありませんが、フォルネイ図書館が工芸・工業デザインに特化した図書館です。

Bibliothèque Forney

1 rue du Figuier 75004 Paris. Métro : M° Pont Marie (ligne 7)

残念なことに、設立の経緯などは調べていません。マレ地区にあり、近隣にピカソ美術館、カルナヴァレ博物館があり、大都会パリでも落ち着いたシックなたたずまいです。観光で訪れても、見学を受け入れてくれるので、おすすめです。

質問番号：④

質疑応答書

科目名：フランスの図書館と読書文化

講師名：須永 和之

質問

リヨン市立図書館が行っている、性的マイノリティへのサービスとは、具体的にどのようなサービスでしょうか。

回答

Point G(ポワン・ジェ)というコーナーを設置して、LGBTQに関する図書、DVDなどの資料を公開して利用を促しています。GはGay(男性同性愛者)ではなく、Genre(ジャンル→ジェンダー)を意味しています。資料の中には、きわどいヌード写真もあります。無論、興味のない人に見せることはしていませんが、相互理解が進むようにイベントを開くこともあります。近々、『現代の図書館』で紹介する予定です。

質疑応答書

科目名：フランスの図書館と読書文化

講師名：須永 和之

質問

アメリカやアジアの図書館についてはよく話題にありますが、ヨーロッパの図書館についてはなかなか聞くことが少ないので興味深く聞かせていただきました。以下質問です。

- ① フランス人の読書週間とはどのように形勢（習慣づけ）されているのか。
- ② 休みが多い図書館であるようだが、フランス人にとって図書館は生活の中でどのような位置にあるのか。
- ③ 子育て支援の手厚い国であるという認識だが、その影響は図書館にあるのか。

回答

- ① 2018年4月23日（世界図書デー）にヨーロッパの国々の国民20歳から74歳までの読書時間（図書、新聞）の調査が発表されて、フランスはなんと最下位で、1日たったの3分間でした。しかしながら、読者の中には1日1時間を超える強者（つわもの）もいて、読書時間の格差が大きいことが判明しました。フランス人にとって読書とは、一概に答えることはできない問題ですね。
- ② フランス人にとって図書館とは、これも回答することが難しい。生活に関する情報を得るための実利的な場所でもあり、文学を読み、歴史を知る教養の場でもある。週の労働時間35時間を尊重して、夜間開館、週末の開館には抵抗してきた図書館職員ですが、マクロン大統領の方針で、商業施設・文化施設は労働時間のフレキシブル化と長時間化を迫られています。国民の意見は多様化しています。フランスの週末とバカンス期間は、観光地以外、閑散として、機能を停止した「死の町」といってよい。気味が悪いくらいに、労働時間と生活時間をきっぱりと二分します。フランスのウィークエンドは、日本人の私には異次元空間でした。
- ③ 子育て支援と図書館ですが、私の個人的な受け止め方では、距離のある問題です。無関係と言い切れないが、関係性を示す根拠を見出せません。